

# 「北方行」に垣間見える中島敦の郭沫若への関心

閻 瑜

## はじめに

中島敦（一九〇九〜一九四二）は、「山月記」「弟子」「李陵」など、中国古典文学に基づく代表作で知られている。しかし、彼は中国古典に限らず、近代中国にも強い関心を寄せていた。例えば、南満洲への修学旅行や、父親の転勤先である大連への帰省を含む計五回の中国旅行を経験し、また、亡くなる直前まで満洲への旅行計画を立てていたが、実現することは叶わなかった。<sup>①</sup>

これらの中国旅行は楽しかった経験であり、旅から得た成果の一つが、一九三三年ごろに執筆が始まり、三六年に未完のまま終わった唯一の長編小説「北方行」である。この小説は一九三〇年の中国を舞台にしており、壮大な長編作品になるはずであったが、導入部を終えたと思われるあたりで中断された。「北方行」の中で、主人公の一人である若い娘英美が郭沫若（一八九二〜一九七八）の恋愛小説を読んでいるという設定がある。すなわち、中島敦は日本作家の中で早い段階から、郭沫若の作品に興味を持っていたことが推察される。先行研究では、中島敦や「北方行」の主人公である英美が、郭沫若の初期作品を読んだことがあるはずであるという指摘に留まっており、中島敦と郭沫若との関わりについての詳しい考察はまだ行われていない。<sup>②</sup> 中島敦は若くして亡くなり、交友範囲も狭かったため、周辺資料が少ない。さらに、一九四二年八月頃に彼は自らの手で、手紙や原稿など多くのものを風呂の焚き付けにし

て焼き捨てたため、中島敦に関する現存の資料は限られている。中島敦はどのようにして郭沫若の作品に注目し、どの作品を読んだのか。本稿では、残されたわずかな日記・書簡・蔵書・創作断片・家族や友人の回想、および周辺資料を通じて、「北方行」を中心に、中島敦と中国現代文学の開拓者である郭沫若の作品との関連を探求したい。

### 一、中島敦の中国への関心における家族の影響

中島家は、中島敦の自伝的小説「かめれおん日記」(一九三〇)において「父祖伝来の儒家」という表現で描かれている。敦の祖父である中島慶太郎(一八二九〜一九一一、号は撫山)は、文化・文政期の名儒、亀田鵬斎直系の門下であり、両国に私塾「演孔堂」を開いたが、後に維新の動乱を避けて埼玉県の久喜に「幸魂教舎」を創設し、門弟は千人を超えるほどであった。祖父の撫山には七男三女がおり、全ては幼少期から儒学の薫陶を受けている。中島敦と特に親しい関係を持っていたのは伯父の端、伯父の竦、および叔父の比多吉であった。中島敦が近代中国に強い興味を抱く背後には、家族から受けた影響が最も大きかったと考えられる。

#### (一) 伯父・端からの影響

伯父の端(一八五九〜一九三〇、号は斗南)は、中島敦の自伝的小説「斗南先生」(一九三三)に登場する重要な人物である。生前、多くの原稿を執筆したが、ほとんど虫に食べられてしまい、まだ文字が読みとれる僅かな遺稿が『斗南存藁』(文求堂書店、一九三三)として出版された。斗南と親交のあった清末の碩学、羅振玉(一八六六〜一九四〇)は序文を執筆し、斗南を敬愛し、天下の安否を一日も忘れないことを高く評価し、その文章も絶賛している。郭沫若の著書『卜辞通纂』(文求堂書店、一九三三)の付録には、「斗南は漢文による詩文集が刊行され、大いに唐人の風采がある」と記載されている。

端は中国の国力振興が日本にも影響を及ぼすと考え、辛亥革命前後、長期間にわたり中国各地を旅し、学者や知識人と交流したが、清の衰退を目の当たりにして帰国した。中華民国が成立した後、内戦が続く中、再び中国に渡り、

多くの都市を転々とした。しかし、途中で宿痾が再発したため帰国し、一九三〇年に亡くなった。

端は著作『支那分割の運命』（政教社、一九二二）で、中国の分割が日本にも悪影響を及ぼすと警告し、国民を奮起させる呼びかけを行った。彼は中国の現状や歴史に精通し、中国の人物や民族性に深い洞察を示している。中島敦も自伝的小説「斗南先生」において、端の論旨が概ね正しいことに驚いていると記している。興味深いことに、「北方行」に登場する「中国人通有の同郷精神」や「強い郷党精神」という中国人の特質についての見方は、伯父の端が著書『支那分割の運命』で述べた「支那人は各省の觀念ありて、国家的觀念なし」、「支那人が同郷の觀念は極めて強く且盛なり」という表現と一致している。この事実から、まだ大学生であった中島敦が中国社会について深く理解する背後に、おそらく伯父からの情報提供があったと考えられる。

敦は生後まもなく両親が離婚したため、父の転勤先である郡山男子尋常小学校に入学する六歳まで、久喜の実家で育てられていた。伯父である端は生涯独身で、久喜の実家に住んでいた唯一の成人男子として、敦と親しい関係にあった。敦は端に可愛がられ、端が入院中には中国時局に関する新聞の記事を敦に読ませることがよくあった。また、小説「北方行」は、ちょうど端が亡くなった直後の一九三〇年の夏から秋にかけての中国北部を舞台としている。中島敦は新聞記事を通じて当時の中国情勢を学び、さらに中国から帰国したばかりの端から情報を受けたことであろう。端は、敦にとつて最も影響力のある人物であるという指摘があるほど、彼の中国への関心と作品に大きな影響を与えたことが窺える。

## （二）伯父・疎からの影響

敦の自伝的小説「斗南先生」において、伯父の疎（一八六一〜一九四〇、号は玉振）は「髭伯父さん」と呼ばれている。敦の次男の名前は疎に命名された。<sup>6</sup> 敦は伯父の疎と親しい関係で、学生時代には一緒に旅行したり、将棋の相手をよくしたりした。また、疎は森鷗外による史伝「伊沢蘭軒」に登場する勝田鹿谷の伝を調査するように敦に頼んだことがある。この経験が、敦が鷗外に興味を持ち、鷗外研究を始めたきっかけとなった可能性が指摘されている。<sup>7</sup> 中島敦

は伯父の竦との結びつきが深く、生涯独身の竦に可愛がられていたことがうかがえる。

伯父の竦は北京で十数年過ごした後、晩年に至るまで東京の善隣書院で蒙古語と中国語を教授した。この期間中、竦は中国の古代文字である篆文の研究に没頭し、中国殷代の木や石、甲骨に刻まれた文字を対象に、文字の起源と意味を明らかにしようとする『書契淵源』（文求堂、一九三四〜一九三七）を執筆した。

特に注目すべきは、郭沫若が伯父の竦を訪問したという事実である。郭沫若は日本に亡命中（一九二八・二九〜一九三七・七）の一九三三年に、甲骨研究の専門書である『卜辞通纂』を上梓した。郭沫若は『卜辞通纂』の別録「中島氏蔵甲骨零片」に記録が残っている。さらに、内藤湖南文庫（関西学院大学図書館所蔵）には、郭沫若のサイン入りの贈呈本が保管されている。郭沫若が甲骨に関する資料を収集するために内藤湖南（一八六六〜一九三四）を訪れ、『卜辞通纂』が刊行された後、一部を内藤湖南に贈呈したと考えられる。同様に、郭沫若は中島竦にも一部を送ったと推測される。郭沫若が日本に亡命中に善隣書院を二度ほど訪れた際にも刑事が同行したため、中島竦の印象に深く残ったであろう。この背景から、竦が敦にこの出来事を伝え、近代中国への関心を刺激した可能性が考えられる。

### （三） 叔父・比多吉からの影響

中島敦の叔父である比多吉（一八七六〜一九四八）は、やや謎めいた人物である。彼はわずか二十六歳の若さで中国大陸に渡り、満洲国が崩壊した戦後に帰国した。比多吉の大陸での生活は四十年以上にわたり、人生の三分の二近くを大陸で過ごしたことになる。日露戦争の際には、特別任務班の一員として敵の側面からの脅威活動に参加した。比多吉は満洲国の高級官僚として活動し、満洲国政府の中枢に位置し、常に溥儀（一九〇六〜一九六七）の側近であった。実際、溥儀の日本訪問にも同行している。溥儀の回想によれば、比多吉は陸軍大将の板垣征四郎（一八八五〜一九四八）が溥儀に満洲国建国の主旨などを説明する際の通訳を務めたとされている。彼は巧みな中国語力と高い儒学の素養によって、満洲国の要人たちから厚い信頼を勝ち得ており、広範な交友関係を築いていた。当時、中国在

住の通訳官の中でも、中国語に優れ、かつ学問にも精通する者は、中島比多吉に勝る者はいなかったとされている<sup>⑨</sup>。

比多吉に関する資料は限られているが、彼は東京外国語学校支那語学科を卒業後、北京の警察学校に招聘されて中国に渡ったとされている<sup>⑩</sup>。しかし、佐野眞一による比多吉の長男である中島元夫への取材によると、父の死後、戸籍を調査した結果、「本籍地も何もかもデタラメ」で、東京外国語学校の支那語学科の卒業ではなく、撫山が久喜に開いていた私塾で中国語を学んだと述べている。また、比多吉自身は仕事に関することやその内容などについて家族には話したことはないとも証言している。中島元夫は、父の比多吉は「出自を隠しながら色々な謀略工作に携わっていた」と述べ、「密偵としてずっと裏街道を歩いてきた人間が、本当の経歴を残すわけがありません」と結論づけている<sup>⑪</sup>。また、比多吉の長女である莊島繁子<sup>あやこ</sup>の回想によれば、比多吉の子分で情報関係の仕事をしていた吉田さんがよく見えて、後に満洲皇帝となった溥儀を連れ出す役割を果たしたと言う。

また、新たな資料である比多吉の手稿「中島比多吉南方視察談」（一九二七年二月末に作成、国立国会図書館所蔵）には、中国の情勢に関する調査内容、国民政府関係者、国民党と共産党の関係、政府の経費などが記録されており、さらに「国民党委員会条例」と国民政府の要人名簿という付録も含まれている。この原稿も、比多吉が情報収集に深く関与していた可能性を示唆している。

さらに、比多吉が最初に勤めた「清国の警察学校」は、川島浪速（一八六六～一九四九）が校長を務めていた「京師警務学堂」である。川島浪速は名高い「男装の麗人」川島芳子（一九〇六～一九四八）の養父として知られている<sup>⑫</sup>。芳子は第一次上海事変や満洲国の建国に関与し、当時の国民政府行政院院長である孫文（一八六六～一九二五）の一人息子・孫科（一八九一～一九七三）から国民政府の機密情報を多く入手し、日本陸軍に大いに貢献していた。一方で、川島浪速の部下であり、満洲建国の裏側で役割を果たした比多吉は、川島芳子の存在を知っていただけでなく、同様のスパイ活動を行い、日本陸軍に協力していた可能性が考えられる。中島敦の「北方行」の創作ノート「断片六」には、北京の花街の交差点近くにある写真屋に飾られた「時の鉄道科長孫科の大きな写真」を、今でもはつき

り覚えていと記されている。この写真が特に印象深かったのは、比多吉から孫科に関する情報を含む当時中国の社会や政治の状況を見聞きしたことを暗示しているであろう。

しかし、比多吉の長男である元夫によれば、比多吉は中国を深く愛し、敵対視していないと同時に、中国から大いに信頼を得ていた。父の比多吉は溥儀が三歳の頃からそばにいて、非常に信頼を受けており、「溥儀は終戦近くになると、日本人をほとんど信用しなくなり、毒殺されるのを恐れて日本人と一緒のときは食事もとらなかったそうです。しかし父親がそばにいたときだけは食事もとったそうです」と述べている<sup>⑮</sup>。また、比多吉の四女である都佐子の夫によれば、敗戦後、比多吉はまだ中国大陸に残る娘の安全を心配し、娘が危険にさらされた際には、自らの娘であることを証明するための書状を書いたとされている<sup>⑯</sup>。

中島敦は、一九二四年の夏休み十五歳の時に、当時天津に住む叔父・比多吉の家に約一ヶ月ほど滞在した。一九三二年八月、満洲国が建国された半年後、大学三年生となった敦は、比多吉を頼って旧満洲と北京など中国北部をおよそ一か月旅行した。敦は比多吉に助けを求め、満洲での就職を望んでいたが、大学時代に教練を受けなかったため見込みがなかったという<sup>⑰</sup>。さらに、一九四〇年に喘息の発作がますます激しくなった時、比多吉から満洲での転地療養を提案されたが、寒地での勤務が難しいと判断し、その提案を断念した<sup>⑱</sup>。ここより、敦と叔父・比多吉との親しい関係が窺え、敦は中国の社会や政治に関する情報を中国通の叔父から聞いた可能性が高いであろう。

ほかに、叔父・比多吉の長女である莊島娶子（一九一〜没年不明）との交流もあった。一九二八年四月から、中島敦は伯父である翫<sup>たず</sup>（一八六六〜一九五三）の一家が住む渋谷道玄坂上の岡本貫一（一八五八〜没年不明）邸の別邸に寄寓するようになった。貫一と翫は夫人同士が姉妹であるという関係であった。一九三〇年からは、比多吉の娘である日本女子大学生の娶子と美恵子姉妹も加わり、親密な交際が続いた。敦は比多吉の長女である二歳年下の娶子と親しい関係にあり、明確な婚約の約束はしていなかったが、互いに愛情を抱いていたと娶子は回想している<sup>⑲</sup>。比多吉が一九〇二年に二十六歳で清国に渡ったため、長女の娶子は中国で生まれ育ち、一九三〇年に十九歳で日本女子大学

に進学したと考えられる。十数年にわたり中国で生活していた斐子は、中国に興味を抱いていた敦に対して、近代中国に関する最新の状況や、当時中国の人気作家である郭沫若についても話したことが考えられる。

家族の影響のほかに、中島敦の谷崎潤一郎（一八八六―一九六五）への関心も、同時代の中国社会と文学に興味を抱くようになる一因とも考えられる。

## 二、中島敦の谷崎潤一郎への注目

一九三〇年四月、中島敦は東京帝国大学文学部国文科に入学し、一九三二年十二月に原稿用紙四二〇枚に及ぶ卒業論文「耽美派の研究」を完成した。この論文は谷崎潤一郎に約三分の一の分量を充て、谷崎の作品の詳細な分析、作風の変化、創作の特徴を包括的に取り上げている。また、論文内の「谷崎作品制作表」には、谷崎が既に発表した全作品が一覧されており、その中には「上海交遊記」も含まれている。年表の最後に、谷崎の二回の中国旅行は私的な大事件として記されている。<sup>⑧</sup> この論文は中島の大学時代における唯一の執筆活動で、その重要性は明白である。

谷崎潤一郎は一九一八年の訪中時で中国文学作家との交流を叶えられなかったが、一九二六年の二度目の訪中で願いが叶った。帰国後、彼は滞在中の経験を旅行記「上海見聞録」（『文藝春秋』一九二六年五月号）と「上海交遊記」（『女性』一九二六年五、六、八月号）に記録している。谷崎は「上海見聞録」において、今回上海に出かけて一番愉快だったことは、中国の若い芸術家や新しい文士創作家との交流であり、詳しい事は「上海交遊記」に連載すると述べている。「上海交遊記」によれば、谷崎は上海で内山書店を訪れ、店主内山完造（一八八五―一九五九）から中国では新しい知識のほとんどが日本の書籍を通じて供給されていること、そして中国新進作家である謝六逸（一八九八―一九四五）、田漢（一八九八―一九六八）、郭沫若の名前を聞いた。特に郭について、彼は医学部出身でありながら医師にはならず文学に熱中し、詩や小説を書き、英語・フランス語・ドイツ語に通じていることから、「支那の森鷗外」と称されていることを内山から聞いた。後日、内山の計らいで内山書店の二階で「顔つなぎの会」という谷崎

潤一郎の歓迎会が開かれ、この会で最初に出会った新進作家が郭沫若であった。宴会後、知り合ったばかりの郭沫若は田漢と共に谷崎の招きに応じて、「一品香ホテル」を訪れ、紹興酒を飲みながら、近代中国の現状と憂国の念を率直に語ったと伝えられている。

谷崎の「上海交遊記」は、初めて日本において、中国の文壇や作家を紹介した随筆である。中島敦は、これらの谷崎の中国旅行記を通じて、中国文壇の最新状況を知り、中国現代文学に興味を持ち、郭沫若の名前を覚えたことも考えられる。一九三〇年の夏季休暇に、中島敦は永井荷風（一八七九〜一九五九）と谷崎潤一郎のほぼ全作品を読破し、南洋庁に赴任中も文芸誌『文藝春秋』などを愛読していたことが、夫人宛ての書簡から分かる。中島が作成した「谷崎制作表」という作品年表には、小説や脚本などのフィクションだけではなく、旅行記「上海交遊記」も含まれており、年表の最後には谷崎の二回の中国旅行が私的な大事件として記載されている。そのため、中島敦が谷崎の中国旅行記を読んだ可能性は非常に高いと言えよう。また、「上海交遊記」において、中国の新進作家である郭沫若が「支那の森鷗外」として紹介されている。中島敦は鷗外（一八六二〜一九二二）に関心があり、大学院の研究テーマとして森鷗外を選んだため、「支那の森鷗外」という郭沫若の名前は中島にとつて注目すべきものだったことであろう。

谷崎潤一郎は、一九三〇年代までには日本が近代中国をあまり理解していなかったことを指摘している。また、渡邊一民は、日本文壇が近代中国を理解し、中国に文学があると主張し始めたのは一九三四年に設立された中国文学研究会が最初であり、一九三五年が一つの転機であったと指摘している。さらに、「北方行」が一九三〇年代の中国と北京を見事に把握していることは、その当時の武田泰淳（一九一二〜一九七六）や竹内好（一九一〇〜一九七七）よりも優れていると絶賛している。当時、日本の文芸誌で中国人作家に関する紹介はまだ一般的ではなかったため、中国の社会状況や中国の作家との交流を綴った谷崎潤一郎の交遊記は、中島敦にとつては中国の社会や文壇の最新状況を理解する貴重な情報源であったと言えるであろう。

中島敦は、家族からの影響を受け、谷崎潤一郎の中国旅行記にも関心を寄せた結果、近代中国の社会や文学に関す

る知識をより深めることができたであろうと考えられる。次は、「北方行」における郭沫若への関心を通じて、中島敦と中国現代文学の接点を考察したい。

### 三、「北方行」における郭沫若の初期恋愛小説

「北方行」には、白夫人の次女英美が、白夫人と一緒に列車で天津から北京に帰る途中、熱心に郭沫若の小説を読んでいる場面が描かれている。

英美は母親の前の席に腰かけ、右脚を左膝の上に交又させて「くんで」熱心に、郭沫若の小説か何かを読んでいる。この娘のことだから、これも、日本語の本ばかり読んでいる母親への面当てかも知れないと思い、又、近頃、母親と伝吉との間を気取ったもののように、口にこそ出さないけれども、目立って不快な様子を、伝吉に——伝吉にはかりではない、彼と同席している時の母親にまで——示していることを考え、白夫人はまた不快げに眼をふせた。（下線は引用者、文庫版『中島敦全集』筑摩書房、一九九三年、一六九頁）

伝吉は北京の大学に通っている貧書生折毛伝吉のことであり、白夫人は中国人の夫に先立たれた日本人である。二人は「恋愛のない、肉体だけの欲望」による醜悪な関係を持っている。一方、伝吉は白夫人の長女麗美とも肉体関係を持つようになる。「日本語の本ばかり読んでいる母親への面当てかも知れない」という表現から、英美が読んでいるのは、郭沫若の中国語の原文だと判断できる。これが中島敦が郭沫若の小説の存在を知っていることを示唆している。中島敦は家族の影響を受けて、現代中国語を一定程度理解できるようになり、近代中国に関する知識が一段と深まると同時に、中国現代文学にも興味を持つようになったと思われる。彼の蔵書には、中国最初の文法専門書（『馬氏文通』上海文林、一九〇二）、本格的な中国語辞書（『字源』商務印書館、一九二二）、中国の小学生向け国語教科書（『小

学国語読本 第一冊初級」中華書局、一九三五）などが含まれている。また、「北方行」の中には中国語の語彙も散見される。さらに、中島敦は現代中国語について非常に堪能とは言えないものの、ある程度の理解力を持っていたこと、同時に近代中国について詳しい知識を持っていることは、友人たちからの証言で示されている。京城中学校の同窓生である湯浅克衛の回想によれば、満洲への修学旅行中に、大連や旅順ではほとんど筆談を頼っていたが、奉天（現在の瀋陽）の城内で、棒や鋏を持った群集に遭遇し、敦は何か早口で喋ったことで危機を脱した<sup>21</sup>。さらに、中島敦が勤めていた横浜女学校の同僚である山口比男によれば、敦は現代中国語を解する能力があり、『上海日報』の映画広告面に書かれている「跑街先生」の意味について説明できるほど、中国の現状に関する知識があったことが窺える。

また、同級生や妻の証言によれば、中島敦は幼い頃から図書館へ頻繁に足を運び、本屋にもしばしば立ち寄り、読書に耽っていた。京城の龍山小学校と京城中学校の同級生である山崎良幸の証言によると、中島が初めて図書館を紹介し、よく鉄道図書館に山崎を連れて行き、すぐに英文学や英語の本を借り出した<sup>22</sup>。また、中島敦の長男である九歳の子どもですら、父の本屋での立ち読み慣れ、中腰で父が読み終わるのを待つ光景があったと、タカ夫人の回想が語っている<sup>23</sup>。ほかに、「北方行」の執筆断片と思われる「ノート第一」には、「支那人の書いた日本観その他、現代支那社会観をよむ事」という記述が見られる。このことから、中島敦が中国人の視点から日本や現代中国社会を理解しようとした意欲が窺え、北京や天津で地元の書店を訪れ、書籍を手にとった可能性が高いことが示唆される。彼が一九三二年頃に中国北部に滞在していた際、多くの新鋭作家の作品集が刊行され、本屋に並べられていたと考えられる。叔父の比多吉が一九二七年に書いた「中島比多吉南方視察談」の「新刊書籍文芸」という一節には、白話（通俗文）で執筆された係文の三民主義に関する新刊図書が、人々によって争って講読され、書店の前には多くの人々が行列を作って市場のような賑わいが広がっていたと記録されている。この記録から、三民主義に関する白話の書籍が非常に人気であることが分かるが、一九二七年という時期から考えると、白話で執筆された新進作家の文学作品や雑誌も同様に人気があったことが窺える。郭沫若に関しては、彼の処女詩集である『女神』（上海泰東図書館、一九二二）

の出版が当時の中国文壇に大きな衝撃を与え、当時の青年たちは強烈な鼓舞を受け、熱狂的に『女神』を歓迎した。さらに、一九三二年までに郭沫若は六つの作品集を出版し、文壇の重要な存在となった。中島敦の蔵書には郭沫若に関する書籍は見当たらないが、中島が中国現地の書店で郭沫若の作品集を手に取り、立ち読みした可能性は非常に高いであろう。

また、「北方行」には、英美は郭沫若の多くの恋愛小説を読んでいることを示す一節がある。

母親の恋愛を——それだけであつたならば——認めてもいい位の気持も持っていた。が、姉までが、その同じ相手と、同じようになるといふのは？（勿論英美は、ただ恋愛——精神的な（接吻をその頂点とする）恋愛。彼女が、小説の耽読によつて総合し得た恋愛の觀念を、彼等の間に想像していた。肉体の実際といふが如きものは想像も出来なかつたし、もし出来たとしたら、彼女は実際に嘔吐したであろう）これは、どうにも不快だつた。如何なる現代的常識を以てしても消すことのできない不快さであつた。彼女は郭沫若の小説の中では、どんな恋愛でも肯定できたけれども、彼女の身辺に實際に起つた恋愛は、いたずらに彼女を生理的不快と、道德的絶望に導くに過ぎなかつた。（下線は引用者、文庫版『中島敦全集』筑摩書房、一九九三年、一七八頁）

英美は自身の恋愛観が小説の耽読によつて形成され、「精神的な（接吻をその頂点とする）恋愛」しか考えられず、肉体的な恋愛關係を想像するだけで嘔吐してしまうのであろう。彼女は郭沫若の小説に描かれた恋愛に関しては、どんな形でも肯定的に受け入れられるが、現実の生活で母や姉と伝吉との恋愛については、「生理的不快」と「道德的絶望」しか感じていない。この部分は、中島敦が郭沫若の作品を一定程度理解していたことを示唆している。それは、郭沫若の小説の中で描かれている恋愛はどのようなものなのか。中島敦は郭沫若のどの恋愛小説を読んだのであろうか。

「北方行」が中断された一九三六年頃までに、出版された郭沫若の作品集に収録されている小説・散文は、日本及び上海における困窮な生活などを描いている身辺小説、歴史小説がほとんどである。一九二一年に日本で結成された当時中国二大文学結社の一つである「創造社」の設立および刊行物を創刊した経緯を回想する『創造十年』もある。父親の愛や夫婦の思い合いを描いた『漂流三部曲』（岐路）「煉獄」「十字架」がある一方、男女の恋愛をテーマにした小説は「牧羊哀話」、「残春」、「カルメラ売り娘」、「葉羅提の墓」、「落葉」の五篇がある。

「牧羊哀話」<sup>⑩</sup>は、十二歳の牧羊少年英郎と十一歳の貴族少女閔佩萋の悲恋物語である。彼らは兄妹のようにいたわり合って、純粹な恋心が芽生えてくる。英郎が身代わりに殺された後、閔佩萋は彼を忘れられず、彼の羊を世話して放牧するようになる。「残春」<sup>⑪</sup>は、妻子持ちの男性の恋を描いている。妻子持ちの中国人留学生愛牟が若い看護婦Sに恋をし、友人の白羊君もSに思いを寄せる。愛牟は罪悪感を感じつつも、Sとの密会を夢で見る。夢の中で、愛牟の妻が夫に捨てられたと思ひ込み、発狂して子どもたちと愛牟を殺してしまう。「カルメラ売り娘」<sup>⑫</sup>は、妻子持ちの中国人留学生「私」が美少女に一途な恋をし、自己破滅の道を歩む物語である。「私」は彼女に取り憑かれ、学業や家庭を犠牲にし、自殺未遂も経験する。家族や友人の励ましで立ち直り、卒業するが、彼女を忘れられず、最終的に彼女を探すために借金し、毒薬と拳銃を持って東京行き列車に乗る。「落葉」<sup>⑬</sup>は、中国人留学生と日本人看護婦の悲恋物語である。主人公である「私」は、結核で病床にある友人洪師武から、日本の恋人菊子からの四十一通の手紙を託される。手紙を通じて、洪と菊子の愛の物語が描かれている。洪は旧式結婚を強いられ自暴自棄な行動の結果、梅毒に感染したと思ひ込んでおり、そのため、菊子に恋心を抱きながらも菊子の愛を受け入れないでいた。菊子は手紙を通じて、洪への愛情を伝え続ける。

特に「葉羅提の墓」<sup>⑭</sup>は、郭沫若の初期の魅力的な短編小説で、少年葉羅提と従兄の妻の純愛物語を描いている。七歳の少年葉羅提は従兄の新婚の妻に恋をし、従兄の妻も次第に自分より十数年も年下の葉羅提に恋心が芽生えて来る。六年後少年葉羅提は町中学校に入り、従兄の妻と離れて生活するようになったが、中学校を卒業して十七歳に

なつた葉羅提はすでに三人目の子どもを妊娠している従兄の妻に再会する。十年も経っても二人の恋心は以前と変わらない。別れる前に、葉羅提は初めて彼女の右手に接吻した。これが二人の恋の頂点であった。その後、彼女が産褥熱で亡くなり、葉羅提は彼女からもつた金の指ぬきを飲み込んで自殺する。

このように、郭沫若の初期の恋愛小説には、異なる恋愛の形が探求されている。「牧羊哀話」では少年少女の純粋な精神恋愛が、「残春」では妻子持ちの男性の恋愛が、「カルメラ売り娘」では妻子持ちの男性の強烈な片思いが、「葉羅提の墓」では少年と従兄の妻との純粋な恋が、「落葉」では恋心を抑える男性に手紙で愛情を語り続ける女性の姿が描かれている。内容から見れば、上記の郭沫若の五篇の恋愛小説の中で、「北方行」の英美はすべて読んだ可能性が考えられる。しかし、接吻を恋愛の頂点と見なす精神恋愛しか考えられない恋愛観から、少なくとも英美は「葉羅提の墓」を読んだことがあると判断できよう。

「北方行」の英美と作者中島敦と同一視することはできないが、前述の「北方行」の記述から、中島敦は郭沫若という名前とその初期小説の存在も知っていたことが確認できる。中島敦が具体的にどの郭沫若の小説を読んだかについては、「葉羅提の墓」が考えられる作品として挙げられる。

郭沫若は日本亡命中の一九二八年から一九三七年まで、『同仁』、『中央公論』、『改造』、『満蒙』など日本の複数の雑誌に作品を発表しており、その中で最も多くの作品が掲載されていたのは『同仁』であった。<sup>55</sup>この雑誌は医学団体である「同仁会」が発行したもので、医学に関する内容だけではなく、中国新文学と作家についての詳しい紹介や作品の翻訳も数多く掲載されていた。特に一九三〇年代には、この雑誌に九篇の小説や戯曲が翻訳掲載され、さらに郭沫若に関する紹介の記事も六篇掲載されている。これらの作品は主に歴史小説と身辺小説で、その中で唯一恋愛をテーマにした小説は「英羅提の墓」（葉羅提の墓）の日本語訳、大高巖訳、『同仁』第八卷第八号、一九三四・八）である。

また、「同仁会」の前身である「同文医会」の主な創立者はすべて「東亜同文会」のメンバーであり、東亜同文会は中国大陸で活躍する人材の育成を目的とし、一九〇一年に上海に私立専門学校「東亜同文書院」を設立した。この

学校は後に大学となり、一九四五年に廃校となった。興味深いのは、「北方行」の主人公の一人である折毛伝吉は東亜同文書院の「怠け学生」として設定されており、「途中で止めた」という描写があるが、具体的な関わりは描かれていない。また、中島敦に関する資料には「東亜同文書院」との関連についての記述も見当たらない。一方、郭沫若の作品が『同仁』に多く掲載されたこと、特に「葉羅提の墓」が翻訳掲載されていたことから、中島敦が郭沫若の初期恋愛小説、特に「葉羅提の墓」を読んだ可能性は否定できないと言える。

### おわりに

中島敦は中国古典だけではなく、当時の中国を度々訪れ、中国現代文学にも関心を寄せていた。彼の唯一の長編小説「北方行」に登場する若い娘英美は、郭沫若の恋愛小説を読んでいるという設定で描かれており、中島敦は日本人作家の中で郭沫若の作品に早い段階から興味を持っていたと推察できる。本稿では、中島敦が郭沫若の作品にどのように注目し、どの作品を読んだかという二つの問題に焦点を当て、中島敦文学と中国現代文学の接点について考察してきた。

中島敦の伯父・端、伯父・竦、および叔父・比多吉は、長期間にわたって中国に滞在し、中国社会の状況に深い理解を持ち、文人学者や政府要人との交友関係を築いていた。比多吉の長女である荘島繁子は、中島敦たちと同じ屋敷に暮らすまで中国で十数年過ごし、中国の現状について詳細な知識を持っていたであろう。中島敦は、親しい関係にあった伯父、叔父、そして荘島繁子から、中国社会や文学界に関する情報を得る機会が豊富にあったと考えられる。さらに、中島敦は谷崎潤一郎の「上海交遊記」を読むことで、中国文壇に関する最新の状況を知り、郭沫若などの中国の新進作家の名前を覚えたと推測される。これらの情報が、中島敦に中国社会の現状を詳細に理解させ、彼の作品「北方行」の創作に影響を及ぼし、作品の内容面での幅を広げたであろう。実際に、中島敦が郭沫若の初期恋愛小説に興味を持ち、特に「葉羅提の墓」を読んだ可能性が高く、その感想を「北方行」の主人公の一人である英美に語る

せているであろうと考えられる。

「北方行」は中島敦の作品の中で唯一恋愛が描かれていた作品である。それまでの中島敦の作品には女性が多量に登場せず、しかし「北方行」で恋愛と多様な愛が描かれており、表現の手法も成熟している。この変化の背景に、中島敦の郭沫若の恋愛小説に対する意識が影響している可能性が考えられる。本稿では、中島敦が郭沫若の作品に興味を持った経緯や、どの作品に注目したかについて詳しく考察したが、郭沫若の初期恋愛小説が中島敦にどのような影響を与えたのかについては、別稿に譲りたい。

## 注

- (1) 拙論「中島敦の中国旅行とその近代中国観の形成―初期断片、習作、「北方行」および和歌群を中心に」(『大妻国文』第四八号、二〇一七・三) 一一三―一二八頁。
- (2) 釘本久春「敦のこと」(文治堂書店刊『中島敦全集第四巻』付録「ツシタラー」、一九五九・六)。
- (3) 渡邊ルリは、「北方行」の主人公である英美が郭沫若の初期の自伝的作品集や小説「カルメラ売り娘」を読んだ筈であると指摘しているが、考察を行っていない(渡邊ルリ「一九三〇年北平における不安と模索―中島敦『北方行』論」、『叙説』第三八巻、二〇一一・三、六二―八二頁)。平松真子の論文は、中島敦の植民地文学における女性に焦点を当て、郭沫若の日本で自由恋愛して結婚した妻と、中国で親の選んだ妻との対立が、中島敦の異文化と文化混淆に対する点に取り込まれている可能性が示唆されている。(平松真子「中島敦論―異文化・文化混淆へのまなざし」、お茶の水女子大学国語国文学会『国文』一二三号、二〇一五・七、八三―九三頁)。しかし、中島敦は郭沫若の作品を読んだことを明確に述べておらず、両者の接点についても言及していない。陳愛華は、平松の見解に賛同すると述べ、中島敦が郭沫若の『漂流三部曲』を読んだ可能性があると指摘しているが、詳細な分析は行っていない(陳愛華「去中心化」的背後―中島敦筆下的混血者」(『東北亜外語研究』総第二十期、二〇一八・二、十一―十八頁)。

- (4) 中島タカ「思い出すことなど」、田鍋幸信編著『中島敦・光と影』（新有堂、一九八九・三）一六〇頁。
- (5) 川村湊「斗南先生、中国を論ず」（『狼疾正伝 中島敦の文学と生涯』河出書房新社、二〇〇九・六）一一〇頁。
- (6) 敦の手帳によると、一九四〇年一月三十一日に男児が生まれた。二月二日に「髭伯父さんの所」へ報告に行き、二月五日の欄に「格卜伯父命名」と記されている（『中島敦全集 別巻』筑摩書房、二〇〇二・五、四二五頁）。また、一九四〇年二月四日付きの中島疎からの書簡においては、格と命名すると記されている（同、四二五頁）。
- (7) 勝又浩『引用する精神』（筑摩書房、二〇〇三・十）九頁。
- (8) 郭沫若の回想録「我是中国人」によれば、彼が日本に亡命中、東京を訪れる際には、どこへ行くにも刑事が常に同行していたと記述されている（『郭沫若全集 第十三巻』人民文学出版社、一九九二）三五〇頁および三五三頁。
- (9) 山根立庵が「いま支那に在る通訳の中で支那語に巧みにして学問を有する者は、ただ中島比多吉あるのみ」と評している（村山吉廣『評伝・中島敦一家学からの視点』中央公論新社、二〇〇二・九、八十七頁）。
- (10) 『統対支回顧録 下巻』（東亜同文会編、一九四一・十二）七七七〜七七八頁、中村光夫ほか編『中島敦研究』（筑摩書房、一九七八・十二、三八九〜三九〇頁）に所収。
- (11) 佐野眞一『崎人巡礼怪人礼讃 新忘れられた日本人Ⅱ』（毎日新聞社、二〇一〇・七）八三〜八四頁。
- (12) 村松梢風の著書『男装の麗人』（中央公論社、一九三三）がベストセラーとなり、その結果、女スパイである川島芳子のイメージが世間に広く定着することとなった。孫科は一九二五年よりおよそ六年間、国民政府交通部長を務め、一九三一年より行政院院長に昇進したが、蒋介石がまもなく辞任するという機密情報を川島芳子に漏洩したため、その後辞職を余儀なくされた。
- (13) 注11、八五頁。
- (14) [https://www.atelier-naruse.com/library/ineko\\_art/2015/04/post-837.html](https://www.atelier-naruse.com/library/ineko_art/2015/04/post-837.html)（二〇一三年二月二日に閲覧）
- (15) 田鍋幸信『写真資料 中島敦』（創林社、一九八一・十二）四八頁。

- (16) 一九四一年二月二十六日付きで、中島敦から父田人宛の書簡(『中島敦全集第三卷』筑摩書房、二〇〇二・二) 五五〇頁。
- (17) 莊島娶子「敦と私」、注4前掲書、一七五頁。
- (18) 『中島敦全集第三卷』(筑摩書房、二〇〇二・三) 一七二頁。
- (19) 鷺只雄氏は「この空白・沈黙期における唯一最大の著述が、『耽美派の研究』なのであり、だとすればこれが持つ意味の大きさ、重要性の所以はみずから首肯される」と指摘している(鷺只雄「谷崎潤一郎論」―『耽美派の研究』序説(『中島敦論―「狼疾」の方法』有精堂、一九九〇・五、一〇六頁)。
- (20) 「中島敦年譜」(『中島敦全集別巻』筑摩書房、二〇〇二・五) 四九九頁。
- (21) 中島敦は『文藝春秋』、『改造』、『中央公論』であれば、南洋庁で読めるようになったが、ほかの文芸誌については、二回も妻・タカに『文学界』、『文藝』、『新潮』を送ってほしいと頼んだことがある(一九四一年九月二八日と十一月九日付きで妻宛ての書簡)。送ってもらった雑誌類を「ガツガツ(久しく飢えていたからね)読んでいる」(一九四一年十一月九日付きで妻宛ての書簡)のである。そして、公学校視察のため、バラオ諸島を回ってサイパンに着いた時に、小さな百貨店で『文藝春秋』一九四一年十二月号を買い、それから「中央公論や改造や、色んな雑誌をガツガツ立ち読みした。サイパンはさすがに雑誌が早く読めていいな」(一九四一年十二月七日付きで妻宛ての書簡)と、文芸誌を久しぶりに読めた喜びを記している。
- (22) 谷崎潤一郎「きのふけふ」(『文藝春秋』一九四二・六く十一月号に初出、『谷崎潤一郎全集』第十四巻、中央公論社、一九八二・六)。
- (23) 渡邊一民「すべては中島敦の中にあつた」(『中島敦』河出書房新社、二〇〇九・十二) 一八く二四頁。
- (24) 湯浅克衛「敦と私」、文治堂書店刊『中島敦全集第二巻』付録「ツシタラ3」、一九六〇・六。
- (25) 山口比男「十二月六日まで」、文治堂書店刊『中島敦全集第二巻』付録「ツシタラ4」、一九六〇・十一。
- (26) 山崎良幸「中島君を憶う」(田鍋幸信編著『中島敦・光と影』新有堂、一九八九・三) 一八五頁。

(27) 同注4。

(28) 藤田梨那『詩人郭沫若と日本』（武蔵野書院、二〇一七・九）八六頁。

(29) 郭沫若は一九二一年に処女詩集である『女神』（上海泰東図書局）を出版してから一九三二年までに刊行した作品集は下記の通り、六冊ある。『星空』（上海泰東図書局、一九二三・十）、『塔』（上海商務印書館、一九二六・一）、『落葉』（上海創造社出版部、一九二六・四）、『橄欖』（上海創造社出版部、一九二六・九）、『水平線下』（上海創造社出版部、一九二八・五）、『沫若創作集』（上海創造社出版部、一九二八・八）。

(30) 一九一九年十一月十五日到北京『新中国』雑誌第一卷第七期に掲載、『星空』（上海泰東図書局、一九二三・十）に所収。

(31) 一九二二年九月『創造季刊』第一卷第二期に掲載、『星空』（上海泰東図書局、一九二三・十）に所収。

(32) 中国語題は「喀尔美羅姑娘」。一九二五年二月二五日『東方雜誌』第二卷第四号に掲載、『塔』（上海商務印書館、一九二六・一）に所収。

(33) 一九二五年九月二五日、十月十日、十月二五日、十一月十日に上海『東方雜誌』第三卷第十八、十九、二十、二二号に掲載、『落葉』（上海創造出版部、一九二六・四）に所収。

(34) 中国語題は「葉羅提之墓」。一九二四年十月十六日作、『塔』（上海商務印書館、一九二六・一）に所収。

(35) 注28、二六三頁。

※未定稿「北方行」は、『中島敦全集』（筑摩書房、二〇〇二）では抹消や挿入などがそのまま復元され通読しにくいいため、文庫版『中島敦全集』（筑摩書房、一九九三）より引用した。